

(別紙の2)

自己評価及び外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	施設内の掲示や毎月の全体ミーティングでの読み合わせなどで周知している。特に個別支援に重点を置き、入居者様一人ひとりの要望を掘り起こし、実現をする過程で、理解が深まっているように思う。	理念を実践する取り組みが、日常業務の中に位置付けられています。【個別ケア伝達用紙】に、入居者の思いや要望を察知した職員が記入し、他勤務職員と検討してその日から実践、実施期間と評価日(継続か変更)を設定します。日々の伝達ミーティングで共有します。このシステムが職員間で定着しており、入居者への素早い対応と振り返りが可能となっています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	散歩などで気軽に声をかけ合うことができている。コロナ禍で地区の運動会や文化祭も中止となっているが、再開したらまた出かけるのを楽しみにしている。育てた花や野菜を届けてくれる方がいる。	コロナ感染症への対応が5類となり、地区行事が少しずつ再開されてきています。11月に開催される川北町文化祭へ出かけて、地域の方々と交流できることを楽しみにされています。以前のように、地域の方と交流ができる機会を広げていきたいと管理者から伺いました。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	地元町内には合歓の様子を機関紙「ほっとねむ」で数ヶ月おきに回覧配布し、法人のブログでも発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	コロナ禍であり行政の指導と当法人の判断により「地域交流会」は開催していないが、隔月で近況報告を行い、サービス内容について意見をお聞きする体制を整えている。	現状では、法人の方針もあり「地域交流会」は近況報告書を届けている状況です。管理者から「会を開催し事業所の様子や取り組みを観て頂きながら、意見交換を行い関係を深めたい。」との要望が聞かれました。	コロナ感染症が5類に移行した今、事業所から積極的に、運営推進会議を開催されることを期待いたします。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	定期的に活動内容を伝え、市からも情報提供を受けている。機関紙「ほっとねむ」もその一助を担っている。市の介護相談員の訪問を近々再開する予定。	事業所機関紙「ほっとねむ」を2か月に1回関係機関へ配布し、事業所の情報提供を行っています。市の介護相談員の訪問日程が決まっていない為、現在は連絡を待っている状態です。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束は行わないことを原則としている。日中の施錠もしていない。	訪問日に外で待ち合わせをしていると、入居者の方が玄関から出てこられ、庭先にあるコスモスの花を少し眺め中に戻られる。少ししてコスモスの花を観に玄関から出て来られる。日々の生活の一コマでした。全職員がeラーニングを活用して、必須項目の研修を受講し、その後会議で振り返りの話し合いを行っています。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	eラーニングにて定期的に学んでいる。また、虐待防止委員会を設置し、お互いに注意を払い、虐待が発生しないよう努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	成年後見制度を利用している入居者様が存在することで、権利擁護を考える機会になっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約時や制度も含めた改定が行われた際は、事業所の考え方や取り組み、入居から退居までの事業者の対応の範囲などについて、文書で説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	コロナ禍で地域交流会や家族会が開催できずにおり、面会も制限している為、家族の意見や希望を直接お聞きする機会は減少しているが、毎月担当が手紙を書き、様子を伝えている。	管理者より「コロナ禍前に行っていた様に、職員と家族、入居者が顔を合わせて気軽に話ができ、要望や意見を伝え合える機会を設定したい」と話がありました。今回の家族へのアンケート結果から、毎月担当職員からの手紙も大変好評ですが、面会や家族会の開催を望んでいる声が伺えました。	数年前までは、家族へのアンケートを事業所の取り組みとして実施していましたので、積極的に要望や意見を伺う取り組みを期待いたします。また、家族面談開催の要望がありますので、検討をお願いいたします。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	毎月の全体ミーティングに合わせ、それぞれで感じている懸案事項を改善提案シートにて提出してもらい、話し合っている。取り組みに変更があれば、次回ミーティングなどで結果を検証している。	毎月、全職員が意見の有無に関係なく【全体ミーティング用シート】を会議前に提出します。入居者の検討事項や日々の業務の課題、解決方法、また業務中での学び・嬉しかった・助けられた等、職員間の情報共有を行っています。年2回の管理者との目標管理個別面談時にも、時間をかけて話をする機会にしています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	個人の目標管理設定手法、改善提案シートを使用し、介護職員処遇改善加算を算定している。更に特定処遇改善加算も算定し、給与体系の改善を実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	認知症介護実践者研修を受講することで、介護に関する新しい考え方やツールを皆で学べるよう心掛けている。目標管理、改善提案シートでの提案などを検討することが、トレーニングにつながっている。eラーニングを導入している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	コロナ禍で中止となっていた市内のグループホームの集まりを、再開してほしいという声が聞かれるので、そろそろ計画したいと思っている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	入居時の情報を職員間で共有し、困りごとや不安に思うこと、要望など、本人の気持ちをしっかりと聞き、安心して過ごすことができるよう心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	入居前の情報収集時から、家族の話ができるだけ聞くよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	入居者と家族のニーズを把握し、事業者として他職種との連携を視野に入れた対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	同じ屋根の下で暮らす者同士、家事や行事、レクリエーションなどを通して、互いに協力しながら穏やかに暮らせるよう関係作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	家族には、定期受診の結果をはじめ、衣類や小遣いの補充などこまめに報告・相談するように心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	コロナ禍であり、外出の機会は減ってしまったが、美容院や床屋、個人商店への買い物など密を避け、感染対策を十分に行なって最低限の支援をしている。外食なども現状を鑑みながら実施していきたい。	現在は、以前よく行っていた食堂への外食を、少しずつ始めています。管理者より「コロナ禍前に毎月行っていた【歌の会】は、顔馴染みのボランティアと入居者が大きな声で歌う楽しみな行事の1つです。状況を見ながら早期に開催していきたい」と話がありました。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	数人ずつでの外出や散歩、家事などを通して互いに協力し、支え合えるように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	退居された方をこちらから積極的にフォローすることは難しいが、求められれば相談、支援をするよう心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	職員間で気づきを共有しあえるように、ミーティングやカンファレンスなどの機会に話し合い、把握に努めている。	理念の実践で記載したように「入居者の思いや意向の把握」は、事業所の基本方針の1つとして取り組み、職員意識も定着しています。早期に実行できる事、全体ミーティングで検討が必要なこと等、スピード感をもった対応に取り組んでいます。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	入居前の暮らしぶりについては、本人との日々の会話の中から発見することも多い。家族からも入居後、話を聞くよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	朝夕の申し送りや昼ミーティング、あるいはカンファレンスなどの機会に気づきを出し合い、必要な情報は共有するよう努めている。伝達漏れがないよう、申し送り表などのツールの改善を常に検討している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	介護計画の見直し時には、疑問に思うことは家族からも情報提供を受け、必要に応じて医師からの助言を参考に、カンファレンスに役立てている。	チーム連携について、毎週1回定期的に法人内の看護師による事業所訪問があり、嘱託医からの助言や医療情報を共有しています。眼科や口腔関係、リハビリ関係等はかかりつけ医の指示に基づき、介護計画に反映し、全体ミーティングで評価・確認を行っています。現在受診の付き添いを職員が行っているため、情報共有に反映しています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	日々の記録や申し送りなどにより、共有を図っている。申し送り時のルールも随時見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	サービスの多機能化についてはまだ検討の域を出していない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	コロナ禍により、地域資源の活用がなかなか難しい状況である。定期的に美容院や床屋に行くくらい。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	入居者と家族に主治医を選んでいただいている。受診前には必ずミーティングを開いて、個人のカルテやノート(外部受診)に記載し、医師に報告している。	かかりつけ医は、本人・家族の意向が尊重されています。地域交流会活動報告資料には、受診した医療機関名が示されています。コロナ禍になり受診には職員が付き、家族や医師への情報伝達をおこなっています。個人カルテや連絡ノートに状況を記載し、その日のミーティングで情報共有しています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	隣接する伊那神経科病院の訪問看護師との情報交換を常に心がけ、必要な医療が受けられるように努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した際は情報提供書による伝達のほか、早期に入院先を訪問し、情報交換するよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	重度化した場合や看取りの対応を文書化し、入居時に事業所としての方針を説明、ご家族の意向を確認している。入居後は、面会や家族会の機会に確認することもあるが、状況に余裕がある間は話題にならないことも多い。	入居時の重要事項説明書にて「重度化した場合の対応に関する指針」を説明し、同意をいただいています。今年になり看取りケアを実施した体験から、医師や看護師との連携、家族への細やかな情報提供や連携の重要性を、全職員が改めて学ぶ機会となりました。偲びのカンファレンスで職員の思いを共有しました。(管理者ヒアリングより)	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	隣接する伊那神経科病院の受診時や看護師の健康チェック時に、医療的な疑問は随時質問し、アドバイスを受けている。事故後は、対応について反省し、全員が、経験を今後に生かせるよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	法人全体の訓練も含めて年3回の避難訓練を実施している。避難マニュアルの見直しは法人の防災委員会を中心に進められていて、BCP計画についても進められている。	法人ホームページのお知らせやブログには、今年6月に実施された法人合同の避難訓練の様子が、外部の人でも分かりやすいように写真を活用して紹介されています。家族、運営推進会議、地域関係者や市町村へは、機関紙「ほっとねむ」を通じて事業所の防災対策への取り組み情報をお知らせしています。地域と防災協定を結んでいます。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	本人の言動を受け入れ、その奥にある感情を想像するよう心掛けている。1ユニットだと入居者との距離が近くなりすぎてしまいがちなので、礼節をわきまえた言動ができていますか、振り返ることも多い。	管理者より「入居者と職員が生活を共に送る中で、なれなれしい関係ではなく、一人ひとりの入居者に合わせた適切な支援を行うことにより、入居者の持っている力を引き出せるような関係作りを目指しています。全体会議やミーティングの中で議題にあげ、話し合っています。」と伺いました。職員ヒアリングでも確認しました。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	意思表示ができる入居者からは、直接本人の意向を丁寧に聞き取るよう努めている。意思表示が難しい場合は、事前の情報や日々の介護から把握してきた性格、表情などから察するようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	基本的な流れはあるが、本人の気持ちや体調を大切に、職員側の都合を優先させることがないよう心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	本人の好みを尊重しながら、天候や季節に合った装いになるよう支援している。生活にメリハリをつけるために、朝晩のパジャマ更衣も声掛けや介助により実施している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	調理や配下膳、片付けまで個々の能力に応じた関わりを意識している。入居者間の相性や、誤解から衝突する場面もあるので、未然に防ぐために準備や食席の位置などを工夫をしている。	開設当初より、入居者と一緒に食事作り、後片付けを日課として取り組んでいます。入居者一人ひとりの力を把握し、男性入居者も菜箸で肉じゃがの鍋をかき混ぜていました。その横では、女性の入居者が水菜を包丁で切ってお皿にきれいに並べていました。仕事をしたい入居者が大勢のため、職員は役割作りの工夫をしています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事や水分の摂取量の把握に努め、少ない方には食事形態を変えたり、補助食品や好みのおやつなどを用意して随時提供している。体重の変化も担当者が毎月評価し、ミーティングで対応を検討している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	介助が必要、あるいは重点的に口腔ケアに取り組んでいる方には付き添って実施している。必要に応じて協力歯科医師の診察を受けている。毎月の口腔ケア研修を担当者が受講し、ミーティングで伝達している。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	ポータブルトイレを使用する方が3名いて、介護用品や支援の方法を随時検討している。おむつや尿キャッチの使用についても、定期的に検討している。	可能な限りトイレで排泄することに取り組んでいます。声かけのタイミングや身体のサインを見逃さないように、トイレ誘導を行っています。スキンケアについても研修を実施しています。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	適度な運動や水分摂取、野菜を中心とした献立などでスムーズな排便が継続できるよう努めている。不快を訴えられない入居者の言動も、排泄という視点を持ちながら、よく観察するようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	一定のパターンはあるが、受診や散髪、体調など本人の都合を考慮に入れて組み立てている。	ゆったりとした家庭風呂の浴室は、開設後早めに改修を行って、重度化しても安全に入浴できるリフトを取り付け、現在1名の方が利用されています。その日の気分により、今日入らなくても明日と無理はせず、入浴を楽しめる時間と会話を大切にしています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	前夜の睡眠や体調に応じて午睡ができるよう支援するほか、夜間はそれぞれのペースで安心して就寝できるような支援に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	伊那神経科病院に主治医を置いている入居者は、処方薬局の薬剤師から情報提供を受け、職員間で共有している。他のケースでも、不明な点は随時確認している。特に処方変更時の状態の変化には注意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	可能な限り「その人らしさ」を引き出せるよう、職員体制や環境、用具など支援方法を試行錯誤している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	まだまだコロナが落ち着かない状況であり、以前の様な外出はまだ難しいが、散歩、受診、理美容から買い物、外出など出かける範囲を広げていきたい。	コロナの感染状況を確認しながら、徐々に外出の機会を増やしています。散歩、受診や理美容、買い物に加え、個人希望の夕食にも徐々に外食に出かけています。来月には久しぶりに地区の文化祭が開催され、皆で出かけることが計画されています。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	金銭管理は職員が行っている。買い物も現在はほとんど職員が行っている。 週1回パンの訪問販売で買い物が楽しみになっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	電話の希望があれば、対応している。暑中見舞いや年賀状を写真入りや自作の押し花のはがきを用意し、書ける人には一言添えてもらい投函している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	テレビ、CDの音量や日差しが不快を招かないよう配慮している。ひな人形や七夕の竹飾り、お盆の飾り物など季節や行事に合わせて演出したり、入居者が手掛けた生け花や作品を飾っている。	天井が高く、ゆったりした明るい空間には、心地よい音量のCDが流れています。大きな開口サッシから外のテラスに続いており、花や野菜が育てられて、成長を眺めて楽しむことができます。壁には大きな習字の作品や、皆で作成した季節の壁画が飾られています。管理者より、「コロナ禍で外出はできませんでしたが、皆で作品作りを楽しむ時間が増えました。」と伺いました。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	共有スペースの広さを活かして、それぞれが気に入った居場所を見つけられるよう支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	入居時には、できるだけ本人が落ち着ける居住空間となるよう、慣れ親しんだ家具や生活用品の持ち込みを家族と相談している。入居後も随時提案したり、要望を聞いている。	各部屋のドアには、部屋名と同じ花の大きなスタンドグラスがはめ込まれ、彩りを添えて親しみやすくなっています。部屋作りは、入居前に家族と見学し、本人の落ち着ける部屋になるよう家具や生活用品を相談して持参されます。部屋を見せてくださった入居者の方は、「自宅で慣れ親しんだお気に入りの籐のチェアを持ってこれて嬉しい」と話してくださいました。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	室内に自分で洗濯物が干せるよう、用具を揃えたり、転倒予防や希望に応じて家具のレイアウトを変えるなど、安全な生活の場になるよう努めている。		